

# 幼から小へ学びが続く「架け橋期のカリキュラム」の具体化の試み

— 領域「環境」と生活科の視点から —

Attempt to materialize a “Transition period curriculum” where learning continues from kindergarten to elementary school

— From the perspective of the field “environment” and living environment studies —

次世代教育学部教育経営学科

三堀 仁

MITSUBORI, Hitoshi

Department of Management for Education

Faculty of Education for Future Generations

**要旨：**幼児教育と小学校教育との接続のために「架け橋期のカリキュラム」の作成が求められている。小学校区の実情に合ったカリキュラムを保育士や教師が共同で作りによって子どもの学びのプロセスが見え、指導内容や方法を共有することができる。「生きたカリキュラム」にするためには、大枠だけの表面的なものにとどめるのではなく、具体的なレベルでの検討がなされなければならない。ここでは季節や自然と関わる活動を取り上げ、幼児教育の領域「環境」と生活科の内容5・6に視点を当てた活動計画案の作成を試みた。

**キーワード：**科学的な見方・考え方の基礎、期待する具体的な子どもの姿、幼小交流合同指導案

## 1. はじめに

幼児教育と小学校教育との接続については、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムの開発は見られるものの、子ども同士の交流や職員間の交流の段階にとどまっているのが現状である。子どもの学びの姿が「見える化」できるカリキュラムが開発されるならば幼・小の指導者に有効であり活用できる。

## 2. 「架け橋期のカリキュラム」の現状と課題

令和5年2月、幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会によって「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」がまとめられた。『幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）』（以下「手引き」と略す）によれば、育成を目指す資質・能力を視野に入れながら、幼・小の架け橋となるカリキュラムをつくり具体化し実践を積み重ねていくことが重要であるとし、「手引き」にカリキュラムのイメージが示された。①期待する子供像②遊び

や学びのプロセス③園で展開される活動/小学校の生活科を中心とした各教科等の単元構成等④指導上の配慮事項⑤子供の交流⑥家庭や地域との連携といった項目について、0歳～、5歳児、小学校1年生、小学校2年生～のそれぞれの特徴を現場の指導者が協働でまとめ、策定するものである。全国各地で熱心なカリキュラム開発が進められ優れたモデルが示されている。

「手引き」は形だけの模倣にならないようにと注意喚起をしている。一覧表を作成して終わりではなく、さらに具体化する必要がある。そのためには活動レベルまで落とした活動計画案の作成が求められる。

「架け橋期のカリキュラム」の具体化については、三堀（2023）でも触れたが、本稿では「活動計画案」として項目や記述内容を明確にし、具体的な子どもの姿が見えるように改善することを目指す。

## 3. 研究方法

「架け橋期のカリキュラム」をさらに具体化、活用するために筆者は次の①～③を行う。

- ①「活動計画案」の枠組み（日時・場所・テーマ・目標・活動内容・配慮事項・場面設定等）を作成する。各項目は「架け橋期のカリキュラム」に示された「共通の視点として考えられる項目（例）」に基づくが、具体的な姿や手立てが見えるように工夫する。
- ②幼・小の活動内容で比較的共通しているものから一つ取り上げ、「活動計画案」に落とし込んでいく。ここでは、領域「環境」と生活科の内容5・6<sup>1)</sup>と関連した季節や自然に関わる遊びを扱う。
- ③幼小交流合同活動計画案の具体例を示す。  
「活動計画案」の活用方法の一つとして合同活動案を例示する。
- ①②については、東京書籍『あたらしいせいかつ』上（令和2年版）の「ふゆのあそびずかん」に紹介された「たこ」を例とし、これを年長（5歳）児、1年生、2年生の活動の中でどのように扱うかを活動計画案に表し、3年間の段階の相違を例として示そうとするものである。③は、年長（5歳）児と2年生の春の公園での交流活動の具体例を示す。

#### 4. 活動計画案の作成

##### 4.1 年長（5歳）児クラスの活動計画案



通常は日案・週案・月案として立てられる保育計画であるが、表1の活動計画案は少し焦点を絞った形になっている。

ここでは生活科の冬の活動と関連するテーマとして「お正月遊び」を例として取り上げる。期待する子ども像は「健康」「人間関係」「環境」などの視点から示され、遊びや学びのプロセスは「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」として自然との関わりや思考力の芽生えなどと関連するとともに、生活科の内容5・6とのつながりを明記している。

様々なお正月遊びを楽しむ中の一つとして凧揚げが紹介されているが、「指導上の配慮事項」に示したように、園児の興味があれば保育士が寄り添って援助することを基本とし、小学校の授業のような形態ではないことが分かる。「期待する具体的な子どもの姿」は想定される園児の率直な言葉や行動を書き込むが、園児の個々の名前が入ることも考えられる。

小学校の教員が見たときに、園では環境構成や園児の興味・関心を重視したきめ細やかな教育が行われていることが理解できるような記述が望ましい。

表1 年長児の活動計画案（例）

日時（時期）・場所		1月	保育室及び園庭
テーマ（単元）		お正月遊び	
期待する子ども像		戸外で体を動かして元気に遊ぶことができる。 お正月（伝承）遊びに興味を持ち、友だちと一緒に遊ぶことができる。 制作を楽しみ、自分なりに工夫して作ったり遊んだりすることができる。	期待する具体的な子どもの姿 お正月遊びに興味をもち、他児と一緒に楽しく遊んだり進んで作ったりしようとしている。 うまくできるまで粘り強く取り組んでいる。 「私が作った凧が揚がってうれしい」「みんなで走って楽しかった」「明日もやりたい」
遊びや学びのプロセス		⇒生活科・内容5（季節の変化と生活）内容6（自然や物を使った遊び） 自然との関わり（風を利用した凧の面白さや不思議さに興味をもつ） 思考力の芽生え（工夫したり友だちの考えに触れたりする）	
活動内容・展開		①お正月の歌や凧揚げの歌を歌う。 ②お正月に遊んだことや楽しかったことを伝え合う。 ③それぞれ自分の好きなお正月遊びを楽しむ。 ④作って遊ぶ活動を行う。 ⑤地域の高齢者に教わりながら一緒にお正月遊びを楽しむ。	場面設定図  園庭
指導上の 配慮事項	環境構成 準備	十分な数の遊具（コマ、お手玉、けん玉、羽根つき、凧）を用意し、自由に手に取れるようにする。また、松ぼっくりのけん玉やビニル凧、厚紙のめんこなど簡単に作れるものは見本と材料を用意する。 友だちと一緒に作ったり遊んだりする場を用意する。	
	教師の関わり	お正月遊びを保育者が率先して行い、興味をもたせる。 思い通りにいかない遊びもあるので、保育者が継続して一緒に遊び、できたときには大いにはめて達成感を味わわせる（無理強いはいしない）。 凧作りは予めいくつかのパーツを作っておき、簡単に組み立てることができるようにするとともに、マーカーで自由に絵を描けるようにする。 園庭で凧を揚げる際には糸が絡まらないように保育士が援助し、走る際に人や物にぶつからないよう配慮する。	表現活動例 

#### 4.2 第1学年生活科の活動計画案

表2は、1年生の生活科の内容5（季節の変化と生活）を扱った「ふゆをたのしもう」の小単元「そとであそぼう」で設定した風を教材とした活動計画案である。内容6（自然や物を使った遊び）も当てはまる。

「そとであそぼう」の活動は、冬の季節感を風の冷たさや陽ざしの温かさなどについて遊びを通して体感させることをねらいとしているが、空気や影といった理科の学習につながる要素があることを指導者は把握しておかなければならない。もちろん理科の準備段階ではなく児童に説明する必要はないが、ここで十分に風や影で遊び、経験として空気や影の存在を実感しておくことは科学的な見方・考え方の基礎を養う意味で大切である。

風づくりは身近な材料を使って工夫して作る遊び道具として適している。うまく揚がらないのはなぜか試行錯誤しながら改善することができる。揚げるときには走って風を起こすことや吹いてくる風の向きなども考える必要があり、児童に様々な気づきを与えることができる。活動場面は校庭とつながっている教室が適している。

活動計画案の中で重視したい項目は「期待する具体的な子どもの姿」である。評価規準を具体化したものであり、通常の学習指導案の本時案に示される評価規

準や想定される児童の反応を記述したものである。この部分をできるだけ具体的に数多く記入することが大切で、スペースをもっと広げてもよい。幼稚園・保育園の指導者がこの欄を見れば、同じ風揚げ遊びでも生活科ではこうした児童の姿を求めているのかと具体的に理解できるからである。

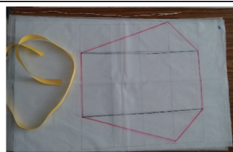
「教師の関わり」も丁寧に記述することが求められる。「どうしてかな」「○○だったんだね」という言葉かけを行うことで気づきを意識させたり確かなものにさせたりする教師の働きかけが見えるようにする。また、「風の足を長くしたらうまく揚がったよ」といった「○○したら○○になった」と科学的な見方・考え方の基礎につながる気づきを引き出したいという意図を明確にすることができる。

こうした具体的な記述によって、同じ冬の遊びでも幼児教育と生活科の授業では、重なる部分もありつつまた違いもあることを明らかにすることができる。これは1年生と2年生の学習活動においても同様のことが言える。例として同じ風を教材とした2年生の活動計画案を次に示す。

#### 4.3 第2学年生活科の活動計画案

取り上げた風作りの活動事例は、教科書の上巻に掲載されたものである。上巻は1年生、下巻は2年生が

表2 第1学年生活科活動計画案（例）

日時（時期）・場所	1月（3時間扱い）	教室及び校庭
テーマ（単元）	そとであそぼう（大単元：ふゆをたのしもう）	
期待する子ども像	生活科・内容5（季節の変化と生活）内容6（自然や物を使った遊び） 風を利用した風遊びの面白さに気付くことができる（知・技） 風を工夫して作ることができる（思・判・表） 友だちと風遊びを楽しむことができる（態）	期待する具体的な子どもの姿 風によって風が揚がることに気付いている。 見本の風を参考に作りながら左右のバランスの大きさに気付いている。
遊びや学びのプロセス	科学的な見方・考え方の基礎を養う ⇒幼児期10（自然との関わり、思考力の芽生え） ⇒理科・（3年）A物質とエネルギー（風の力）	「速く走ると風がよく揚がるよ」「風車の時と同じだね」「足の長さが違くと風がくるくる回っちゃう」「風に風が当たって重たかった」
活動内容・展開	①生活科（上巻）の風の作り方を参考に風作りをする。友だちと協力しながら、自分なりの表現（色・模様）で作る。 ②校庭で走りながら風を起こして風を揚げる（人や物にぶつからないように）。よく揚がるように糸の位置や風のバランスを調整する。 ③気付いたことや友だちのよさを発表し合う。	場面設定図 校庭
指導上の配慮事項	環境構成準備	型紙などを使って厚めのビニルに風の輪郭を描いておく。たこ糸、紙テープ、楊枝、竹ひご（36cm）を準備する。電線や障害物がない所で揚げる。グループで相談しながら作業ができるように広めのワークスペースを用意し、校庭と行き来ができるように1階の教室で活動を行う。
	教師の関わり	風車や紙飛行機など風や空気を感じさせる遊びの流れの中で活動する。作る⇒遊ぶ⇒直す⇒遊ぶといった試行錯誤するプロセスを大事にする。「どうしてかな」「○○だったんだね」と問いかけたり確認させたりし、「○○したら○○になった」という関係性に気付くように働きかける。友だちと競争したり教え合ったりするように児童同士をつなげていく。工夫している児童や粘り強く取り組んでいる児童を全体に紹介する。
		表現活動例 

それぞれ使用するものと捉えられがちであるが、生活科の教科書は各社上・下巻構成になっている。これは2年生であっても上巻のページから必要な情報を得たり活動に取り入れたりするような活用方法があることを意味している。

2年生の冬から春にかけては各社とも「成長単元」が多く、時数的にはゆとりがある。こうした時期に小さな単元を各学校で設定することは十分可能である。

表3は、2年生で扱うとした場合の凧作りの活動計画である。

1年生で扱う場合との大きな違いは2つある。一つ目は、科学的な見方・考え方の基礎という点は押さえつつも、1年生段階からのレベルアップを図るような働きかけである。凧がうまく揚がることについての気付きとして、1年生では「〇〇したらよく揚がった」という気付きを期待したが、2年生では「凧の足は紙テープを50cmにして2本ずつ付けるといいよ」というように「〇〇を〇〇したらよく揚がった」と原因と結果の関係をもう少し期待したい。こうした気付きの質を高めさせる教師の働きかけが求められる。

二つ目は他教科とのつながりである。この場合は算数のC測定との関連である。1年生の凧づくりの段階では長さの単位について学んでいないため、型をなぞるような方法で凧の形を作ったが、2年生のこの時期

ならば、9cm四方の正方形のマスを描き、竹ひごはマス目4つ分、糸を止める位置は真ん中から左右へ2つ分と、算数の既習事項を使って作成することができる。子どもの気付きを引き出す問いかけも「凧の足の長さは紙テープ何センチがいいのかな」と数値を聞くようにすると児童は意識するようになる。

このように気付きの質を高める教師の働きかけは、結果として科学的な見方・考え方を養う3年生以降の理科の学びへとつながっていく。

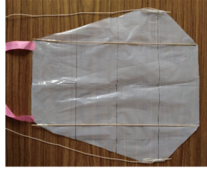
「架け橋期のカリキュラム」の期間は5歳児から1年生の2年間とされているが、ここで示したように2年生の内容は3年生へとつながる「架け橋」でもあるので、生活科を学ぶ2年生までを含めるのが望ましい。その意味で、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議の平成22年の報告に示された「接続期」を幼児期の年長から児童期（低学年）とする捉え方は評価できる。

### 5. 幼小交流合同指導案の作成

「架け橋期のカリキュラム」を基に筆者が作成した活動計画書の枠組みを使うことによって、幼小交流の活動計画書を容易に作成することができる。

交流活動を行う際には交流する相手側のねらいも把

表3 第2学年生活科活動計画案（例）

日時・時期（時数）・場所		1月（3時間扱い）	教室及び校庭
テーマ（単元）		たこを作ってあそぼう	
期待する子ども像		生活科・内容6（自然や物を使った遊び）関連⇒内容5 凧の面白さや不思議さに気付くことができる（知・技） 凧を工夫して作ったり改善したりすることができる（思・判・表） 友だちと協力して凧遊びを楽しむことができる（態）	期待する具体的な子どもの姿 糸の結び目に着目し糸の長さや凧の左右のバランスが大切であることに気付いている。 凧の向きを考えながら凧を上げている。
遊びや学びのプロセス		⇒幼児期10（自然との関わり、思考力の芽生え） ⇒理科・（3年）A物質とエネルギー（風の力） ⇔算数・C測定（長さの単位cm）	「たこの足はテープ2本で〇cmぐらいにするとよく揚がるよ」「最初地面において持ち上げるように揚げるといいよ」
活動内容・展開		①生活科（上巻）の凧の作り方を参考に凧作りをする。友だちと協力しながら、自分なりの表現（色・模様）で作る。 ②凧の向きを考えながら凧を揚げ、よく揚がるように糸の位置や凧のバランスを調整する。 ③改善点をカードにかき、気付いたことや友だちのよさを発表し合う。	場面設定図 校庭
指導上の配慮事項	環境構成準備	安全を第一に考え、活動場所を設定する。 制作（改善・調整）場所は活動場所（校庭）に近い所にする。 友だちと相談しやすいようなワークスペースをセットする。	教室 作業台 活動スペース 作業台
	教師の関わり	9cm四方の正方形を1マスとして考えさせるようにする。 作り方の工夫、上げ方の工夫の2つの工夫を意識させる。 糸の位置や足の長さなどを試行錯誤させ「〇〇を〇〇するとうまくいく」といった気付きを引き出す。その際、できるだけ「2cm」「3回」というように数値を使って表現できるようにする。 凧の向きや強さを意識させ、走らなくても凧は揚がることに気付かせる。 児童のよい気付きは、全体の場で紹介する。	表現活動例 

握する必要があるため合同指導案の作成は大きな意味をもつ。従来、園と学校では活動（指導）案の書き方が異なり、交流活動を企画しても日案・週案と単元指導計画とを交換するにとどまり、合同で一つの活動計画案を作成することは、労力も必要なことから一般化していないのが現状である。

表4は5歳児と2年生が異学年交流をしながら春の自然に親しむことを意図した合同指導案例である。5歳児にとっては、進んで戸外で遊ぶ（健康）、友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう（人間関係）自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ（環境）などの領域と関わり、2年生にとっては、内容5（季節の変化と生活）や内容4（公共物の利用）、そして内容3（地域と生活）につながっていく活動である。

それぞれに活動目標があるが、「架け橋期のカリキュラム」を具体化した活動計画があれば、これに少し手を加えるだけで合同指導案を作成することができる。

ここでも「期待する具体的な子どもの姿」が重要である。発達段階からどのような行動や発言が想定されるか、指導者が共有することが望まれる。オオバコずもうはどの子も興味をもつであろう、シロツメクサの冠は数名作った経験がある、といった具体レベルの想

定される姿をもとにした記述があると活動場面をイメージしやすくなる。

「教師の関わり」も指導の共有という点で大切である。2年生に「何でもやってあげるという姿勢はよくない。年長児は自分でできる。遊びを提案しながら一緒に楽しく活動することが大切と伝える」など、押さえるべき点を明確にすることができる。

交流実施後には活動を振り返り、活動計画案を修正していくことが重要である。園児や児童の作品や気付きを「表現活動例」に画像として取り込んで保存したり、「築山を転がる遊びが人気であった」「池のオタマジャクシに興味をもった」などの子どもの行動を追加・修正したりしていくと次年度の活動につながっていく。

## 6. まとめ

「手引き」では、「架け橋期のカリキュラム」を表5のようなイメージで紹介されている。左から右に子どもの発達に応じた学びのプロセスや活動展開、指導上の配慮事項が示されている。共通の視点を整理することで5歳児と1年生の比較もできる。

表4 幼小交流合同指導案（例）

日時・場所	4月20日（10時～11時）		いずみ公園	たちばな幼稚園	さくら小学校
	5歳（年長）児		2年生		
人数	(15名)		(20名)		
テーマ（単元）	春の公園で小学生と遊ぼう		春の公園で園児と遊ぼう（生活科）		
期待する子ども像	公園で体を動かして元気に遊ぶことができる。 自然を取り入れた遊びに興味を持ち、友だちや2年生と一緒に遊ぶことができる。 約束を守り安全に気を付けて遊ぶことができる。	期待する具体的な子どもの姿 ナズナで音遊びをしたりダンゴムシを見つけたりして友だちや2年生と楽しく遊んでいる。順番を守ってすべり台を使っている。 「2年生とオオバコずもうをやったよ」「テントウムシが飛ぶところを見たよ」	期待する具体的な子どもの姿 冬のいずみ公園の自然の様子の違いに気付いている。園児の名前を覚えて親しく接し遊びを楽しんでいる。 「シロツメクサの冠の作り方を教えてあげたら上手にできたよ」「○○ちゃん（園児）、ジャングルジムの一番上まで上がったよ」	内容5（季節の変化と生活）関連⇒内容4 春の自然の面白さや不思議さに気付くことができる（知・技） 園児と関わりながら遊ぶことができる（態） ⇒幼児期10（自然との関わり、社会生活との関わり） ⇒生活・内容3（地域と生活） ⇒理科・（3年）B生命・地球（身の回りの生物）	
遊びや学びのプロセス	⇒生活科・内容5（季節の変化と生活）内容4（公共物の利用） 身近な自然との関わり（春の草花や生き物に興味をもつ）社会生活との関わり（公園の利用）				
活動内容・展開	①安全に留意して公園へ移動する。（保育者3名） ②2年生と挨拶。グループ（3+4人）をつくる。 ③グループの2年生と公園内で一緒に遊ぶ。 2年生と遊ぶ、水分補給をする。 ④活動終了。挨拶をする。 ⑤安全に留意して園に戻る。		場面設定図 ①安全に留意して公園へ移動する。（指導者2名） ②園児と挨拶。グループ（3+4人）をつくる。 ③園児が楽しめる遊びを紹介し一緒に遊ぶ。 草花かざり、生き物さがし、遊具遊びなど ④活動終了。挨拶をする。 ⑤安全に留意して学校に戻る。		
指導上の配慮事項	環境構成準備	事前に下見をし、草花、生き物の様子を把握する。木陰、トイレ、池の様子、危険生物（ハチ、チャドクガ）、道路情報等についても確認する。 着替え、応急医療バッグ等を準備する。 公園の中で自由に遊べるようにする。			
	教師の関わり	事前に小学校の担任と情報交換し、児童の様子を共有しておく（グループビンクに配慮）。 各グループの活動の様子を見守る。危険な行動をしていたら直ちに制止する。 遊びが停滞したりトラブルが起きたりした場合は状況を見極め必要に応じた援助を行う。 春の自然に目を向けるよう働きかけ、様子を見ながらこの時期ならではの遊びなども紹介する。	表現活動例 	表現活動例 	事前に園の担任と情報交換し、園児の様子を共有しておく（グループビンクに配慮）。 園児への関わり方について事前に指導する（何でもやってあげるとい姿勢はよくない。年長児は自分でできる。遊びを提案しながら一緒に楽しく活動することが大切と伝える）。 各グループの活動の様子を見守り安全面など必要に応じて指導する。

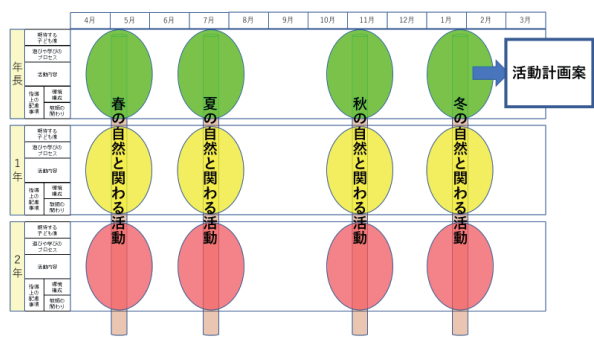
表5 「手引き」による「架け橋期のカリキュラム」  
 (『手引き』 p.21)

架け橋期のカリキュラムのイメージ

		0歳～	5歳児												小学校1年生												2年生～
共通の領域として考えられる領域			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
活動する子ども	遊びや学びの場																										
	園で展開される活動、小学校生活科を中心とした各教科の単元・単元等																										
関係者の配	先生の関わり																										
	学校や園の中で活動を通して学ぶ機会を豊かにする等の連携等、小学校の事後づくり																										
子供の成長																											
家庭や地域との連携																											

こうした捉えは重要であるが、作成して終わりにならないようさらに具体化したレベルでの幼から小への学びや指導が見える活動計画が必要である。

本稿で示したような、季節の自然を扱った活動計画は年長児でも低学年でも年間を通して設定されるので、図1のように、3段に並べて串団子状のモデルで表すことができる。団子のところには、本稿の表1～3の活動計画案があてられる。



(筆者が作成)

図1 串団子モデルの架け橋カリキュラム

「手引き」によると「園では、小学校以降の生活や学習を見通した幼児教育の工夫が必要ではないか」(p.27)「小学校では、園での遊びや生活を踏まえた小学校教育の工夫が必要ではないか」(p.28)とある。活動計画案を縦に見比べると、指導のポイントがより明確になる。「架け橋カリキュラム」を形だけのものにしないようにするためには、できるだけ具体的な場面まで落とし込んで計画・実施・改善する「生きたカリキュラム」にすることが肝要である。

また、ICTを活用し、このカリキュラムを電子データとしてファイルに収めると活用度が高まる。図1で表した基本画面からリンクで活動計画画面に飛ばすようにすれば見やすくなり活動後の修正も容易に可能となる。

本稿では一例の紹介にとどまったが、今後は季節の

自然に関わる活動以外の幼・小の共通する点を模索し、串団子モデルを作成することが課題となる。また、このモデル以外の多様な具体化案も検討していく必要がある。その地域、小・中学校区に即した形を模索することも大切である。

## 7. おわりに

「はじめに」で「子どもの学びの姿が『見える化』できるカリキュラムが開発されるならば幼・小の指導者に有効であり活用できる」と述べた。現場教員から「園ではこういうところを大事に関わってきたのですね」「この活動は結果的に小学校のこのような学びにつながっていくのですね」といった実感を伴った相互理解の声が聞こえること、これが幼小接続のめざすべき姿である。

## 注

- 1) 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領』の第5節 生活の各学年の目標及び内容に次のように述べられている。(5) 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を通して、それらの違いや特徴を見付けることができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることに気付くとともに、それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。(6) 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫して作ることができ、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。(p.113)

## 引用・参考文献

- 三堀仁 (2023) 「領域『環境』から生活科の内容5・6へつながる学びのプロセス」『環太平洋大学紀要23号』 pp55-62
- 文部科学省 (2022) 『幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き (初版)』 pp27-28  
<https://www.city.matsubara.lg.jp/material/files/group/16/t03.pdf>
- 参照日：2024年5月1日
- 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領解説生活編』 東洋館出版pp38-41
- 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館p134

田村学・奈須正裕・吉田豊香（2020）『新しい生活』  
（上・下）東京書籍

中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会（2023）『学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～』  
p7

[https://www.mext.go.jp/content/20220307-xt\\_youji-1258019\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220307-xt_youji-1258019_03.pdf)

参照日：2024年5月1日

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議（2010）「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」  
p29

[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf)

参照日：2024年5月1日